

靴は命を守るための防具

高橋 尚子

スポーツキャスター

TAKAHASHI NAOKO



©スマイル アフリカ プロジェクト / 鈴木勝

PROFILE

1972年岐阜県出身。シドニー五輪女子マラソン金メダリスト。2008年10月に現役引退後、スポーツキャスターやマラソン解説者などとして活躍。09年、月刊「ソトコト」と協働で、ケニアの子どもに靴を贈る「スマイルアフリカプロジェクト」を立ち上げた。

マラソンを始めて23年、中学生の時から、陸上一筋の人生を送ってきました。現役を引退してからも、やはり“走ること”を通じて、これまで応援してくれた人たちに何か恩返しできないかと思っていて。そんな時、ソトコトの方から「スマイル アフリカ プロジェクト」の話をいただいたんです。

日本で履かなくなった靴を、ケニアの子どもたちに届ける。裸足だとばい菌が入って、感染症になってしまうこともあります。そんな状況から一人でも多くの子を救いたいと思い、このプロジェクトは生まれました。

「靴をもらったら、みんな羽が生えたように、うれしそうに走り出すんだろうな」。そんな姿を想像して、ケニアに行くのを本当に楽しみにしていました。でも、ナイロビにあるキベラスラムに一歩足を踏み入れた途端、自分の考えがどれだけ浅はかだったかに気付いた

んです。

辺り一面はバラック小屋、道なき道には汚水が垂れ流しになっていて、転んで手を付くのが怖くて、ゆっくりとしか歩くことができませんでした。ああ、これが現実なんだと。

そこで出会ったモーリスくんという小学4年生の少年は、「陸上選手」になるのが夢だと、キラキラした笑顔で話してくれました。そして私にこう言ったんです。

「大人になったらここから出て有名になって、孤児院の子どもたちを助けてあげたいんだ」

もちろん彼自身も、決して裕福とは言えない生活を送っています。この子にとって、私たちの贈った靴は夢の第一歩になったんだ。もらった靴を宝物のようにギュッと抱きしめて帰っていく姿を見て、胸が締め付けられるような思いでした。

日本で生活していると、「何で靴を履くんだろう」なんて考えることもないと思います。でも彼らにとって、靴は生きていくための“防具”でもあるんです。「靴をもらったら子どもたちの人生は変わるよ」という、ケニア出身のマラソンランナー、ダグラス・ワキウリさんの言葉の意味が初めて分かりました。

私たちマラソンをする者にとっても、一足の靴は戦闘具です。このプロジェクトを通じて、私がすごく大切にしてきたものが、世界とつながるきっかけになることが本当にうれしいです。

靴を贈ることで、すぐに「何かが変わる」わけではないかもしれない。でも、裸足でも元気に駆け回る、ケニアの子どもたちと出会ってしまった以上は、彼らの笑顔のためにずっと、ずっと続けていきたい。難しく考えないで、気持ちが動いたときに行動する。これが私のモットーです。